

プロジェクト計画

- ① プロジェクト計画を目的・方法・研究費等の関連を含めて具体的に記入してください。
- ② グループの場合は、相互の役割分担についてわかるように配慮してください。

主旨または目的：

今日、環境問題は年々深刻になってきており、その影響が温暖化や異常気象などの自然現象に顕著に現れるようになってきている。その改善を考えるに当たって、今年度私たち谷口ゼミは環境問題を地球規模で考えることで様々な角度から環境問題を考え、同時に学校・地域単位で活動することが重要であると考えた。体験学習を通じて感じたこと、経験したことを伝えながら、何かしなければと考える人たちを環境活動に容易に取り組めるようにサポートしていく。

昨年度は、「循環型キャンパスを目指した甲南人の環境意識の向上」に努めてきた。その一環として、甲南大学環境教育野外施設(広野)において無農薬・有機農法によるもち米・野菜作りや、現在のライフスタイルを見直す自給自足生活の体験学習を実施した。また、学内においては生活協同組合北館(以下生協北館)の協力によるリサイクル・広報活動を通じた連携の強化に努めた。さらに、神戸市北区にある「あいな里山国営公園」(国土交通省)において、「あいなバイオパーク」(市民団体)の里山保全活動に環境ボランティアとして参加してきた。そして里山の環境の保全、あいなの里山文化、及び伝統をヒアリングし、データの収集などに取り組んできた。

今年度「キャンパスから始める環境啓発活動」のプランは、昨年度の活動を受け、フィールドでの活動、校内の活動、阪神地域との連携による活動を通し、環境意識の向上のための啓発活動を推進することを目的としている。

申請者(代表者)氏名

プラン 「体験学習を通じた環境活動 『いのち』の環境教育 」では広野でのもち米・野菜作りや自給自足生活の体験学習を通して、いのちの育みを知り、自分たちが苗から育てた野菜を食べることで、いのちの大切さを見直す。

プラン 「パートナーシップによる環境啓発活動 部活動・学内組織との連携を通じた環境意識の向上 」では、クラブや学内組織との連携や「環境啓発シンポジウム」を通して学内での環境意識の向上に取り組む。

プラン 「地域連携による環境活動のネットワーク K E M S ・地域連携プロジェクトを通じて 」では、昨年度に引き続き生協北館において、K E M S 認証取得に力を注ぐとともに、「あいな里山国営公園」(国土交通省)での里山村の復興を支援する環境ボランティアを通じて地域との連携を強め、里山文化を伝承し、伝統文化のデータを収集する。加えて、甲南三学園において幼稚園から大学生まで世代を超えた環境教育を行なう。これらの活動によって環境啓発活動のネットワーク拡大を目指す。

実施方法：

プラン ：体験学習を通じた環境活動
『いのち』の環境教育

谷口ゼミでは、2000年より神戸市北区にある甲南大学環境教育野外施設(広野)において、無農薬による有機農法(堆肥や石灰のみ使用)でもち米・野菜作りを行っている。食物を伝統的農法で育て、成長を観察し、食べることで、命を育む自然のリズムを感じる。それだけでなく、「環境教育の実践 ・ 」(広域副専攻・環境学コース)では実践のスタッフとして参加する事で指導力の向上などにも力を入れている。

申請者(代表者)氏名

さらに、広野での体験学習の活動経過をパネルにし、ギャルリーパンセに展示する。
それによって、甲南人学生の環境意識の向上を図る。

(1) 不耕起農法によるもち米作り

昨年度は伝統的農法によるもち米づくりを継続して、苗床作り、もみまき、田植え、稲刈り、脱穀では足踏み式脱穀機を使い、全て手作業で行なった。



あいなでの不耕起農業
(2006年6月)

昨年度、「あいな里山国営公園」における「耕さない稲作」不耕起農法によるもち米作りを試験的に甲南大学環境教育野外施設の田んぼの一部で実施する。

それに向けて2007年3月から田んぼの一部をあぜで区切り、冬期湛水(冬の時期に田んぼに水を張ること)を開始した。この不耕起農法では、冬期湛水をするこ
とで、一年中、田んぼに生きものが住める自然のビオトープに近いものとなり、アメンボ、イトミミズ、タニシ、ドジョウそして微生物などの生きものが爆発的に増



不耕起農法による冬期湛水の開始
(2007年3月・環境教育野外施設)

える。このような不耕起農法により二次的自然である田んぼに生態系を取り入れる事ができる。命を維持する米を育てる田んぼで多様な生命が宿る。そこから様々な生命が共存していることを知るとともに、自然と人間の本来の関わり方を学べると考える。

1年を通じて伝統的農法と不耕起農法を観察し、収穫量や、田んぼに生息する生きものの違いを観察する。また、そのもち米を自給自足生活の体験学習で食料として使用し、12月には収穫祭を行なう。

稲の成長過程を伝えるために、伝統的農法と不耕起農法で育てた稲を押し葉にし、パ

申請者(代表者)氏名

ネルにしてギャラリーパンセに展示する。田植えの参加者や、参加していない学生にも米作りの過程が見えるようにし、「いのち」について少しでも考えるきっかけとなればと考える。

(2) 伝統的農法による野菜作り

甲南大学環境教育野外施設の農園において、伝統的農法による有機農法で、夏野菜(トマト、ナス、ピーマン、シシトウ、キュウリ、カボチャ、今年度はスイカ、大豆など)・冬野菜(大根、ほうれん草など)・サツマイモの栽培を行なう。野菜を苗から育て成長を観察し、自分達で育てた野菜を収穫する。そして、収穫した野菜を食べる事で、「いのちを育てる」ことの大変さを学ぶ。



夏野菜(2006年)

また、これらの野菜は次に触れる自給自足生活の体験学習で活用する。例えば、スイカの皮を漬物にして食べたり、トマトをケチャップにして保存食にするなどエコクッキングをする予定である。ひとつの作物の調理法を変えることで無駄なく利用し、食環境の充実につなげる。

また、甲南大学10号館横に設置しているミミズコンポストでカフェパンセから出る生ゴミ(1週間約3kg)を処理し、有機肥料にしたものを野菜の栽培に利用する。

(3) 自給自足生活の体験学習

谷口ゼミでは2003年度より継続して自給自足生活の体験学習を行なっている。この体験学習では、夏休みの1週間を、広野において必要最低限の持ち物で生活する。時計を使わず、日の出・日の入りのリズムで生活したり、ガスを使わず、火おこし機を利用する予定である。食べ物は春に植えた無農薬、有機農法の夏野菜や昨年度

申請者(代表者)氏名

収穫したもち米を使用する。今年度は、前年度蚊に悩まされたので、虫除けになるハーブを植える。また、そのハーブをハーブティとしても使用する。食環境の充実を目指し、炭作りなど自然にあるものを道具として加工し、利用できるようにする。そして、現代生活から一步離れた生活をする事で日常において、足りないものや余分なものが見えてくる。みんなで協力して生活することで共同生活での人と人との関わりあいの大切さを感じ、現代のライフスタイルを見直す事を目標としている。



火起こし(2006年)



家作り(2006年)

プラン : パートナーシップによる環境啓発活動

クラブ・学内組織との連携を通じた環境意識の向上

ここではクラブとのパートナーシップ、学内組織との連携による学生、教職員など甲南人の環境意識向上を図ると同時にネットワークを強化する。また、活動の成果を確認するためにアンケート調査を行なう。

(1)クラブと連携して行なう環境啓発活動

昨年度はリサイクルの推進や「環境啓発シンポジウム」を通して甲南人の環境意識の向上を図った。今年度は昨年度の活動を継続すると共に、学生主体のクラブ活動と連携し環境啓発活動を行ない、パートナーシップの強化を図る。

具体的には、

申請者(代表者)氏名

1. KSWLと共に環境についての学内放送を作り情報宣伝活動を行なう。放送の内容は情報パックの内容を元に構成していく予定である。

2. 美術部と共に環境啓発を訴えるポスターを作る。また、山に咲く植物自体を使い作品を作る。そしてその作品をギャラリーパンセに展示する。

3. 茶華道料理部道心会と共に環境活動を行なう。茶道部門とは共に茶道の侘び・さびの精神を感じ、自分達の生活を見直す。華道部門とは学内に花壇を作り、種から植物を育てる。料理部門とは共にエコクッキングのレシピを考え、実際に料理をする。

4. ワンダーフォーゲル部と共に六甲山に登り、ゴミ拾いなどの清掃活動を行なうハイキングを予定している。

このように、学生主体のクラブと共に実際に環境活動を体験する事によって、環境問題への気づきが生まれ、各々の環境意識が向上する。さらに、その気づきが各々の自発的な行動へとつながり、甲南人全体にも広がると考える。また、様々な種類のクラブと連携する事でネットワークが広がると同時に環境問題の視野を多面的に広げる事もでき、新たな発見へつながっていくと考える。

(2) 学内組織とのパートナーシップによる環境啓発活動

1. 第7回「環境啓発シンポジウム」の開催のサポート

甲南大学環境総合研究所主催「環境啓発シンポジウム」における7つの組織【学生部、管財課、生活協同組合、関西明装警備部、神戸エイコーサービス、対馬造園店、谷口ゼミ】と学生とのネットワーク構築のサポートをする。7つの組織それぞれの立場からの現状を報告し、それを学生が把握する事で、甲南大学の学生自身が環境問題を考え、改善するために行動を起こすきっかけになると同時に、

申請者（代表者）氏名

学生とのネットワークの促進につながると考える。

2 . 学内組織との花壇作り

対馬造園と協力して、春・秋には花の植え替えの手伝いをする。さらに、文学部事務員の人達と種から苗をつくり、花を植えるといった活動を行なう予定である。学内が花でいっぱいになると同時に学内組織とのパートナーシップも強化できると考える。

(3) アンケート調査による環境啓発活動の現状把握

全体の環境啓発活動の成果を目に見える形で確かめ、次の活動につなげるためにアンケート調査を行なう。具体的には、クラブの部員に活動の前後、また生協北館の職員に K E M S の認証取得に向けた取り組み前後にアンケートを取る。これらの結果からどれだけ環境意識の向上が図れたかを調べ、成果を確認する。これらの結果を摂津祭で公開したり、生協のホームページの中の情報パックに掲載する事で甲南人の新たな気づきにつながる事が期待できる。

プラン : 地域連携による環境活動のネットワーク

K E M S ・ 地域連携プロジェクトを通じて

ここでは生協北館の K E M S の認証取得、あいな里山国営公園においてのボランティア、甲南三学園との交流を通じて、新しい視点や気づきを形成し、環境意識の向上や自発的行動につながるきっかけづくりとなることが目的である。

申請者（代表者）氏名

(1)環境啓発へとつなげる K E M S 認証取得を目指して

< K E M S の概要 >

近年、環境マネジメントシステムの国際規格である ISO14001 の認証取得が、非常に盛んになっている。しかし、規模的・経済的・時期的等様々な理由でこの規格の認証取得に直ちに取り組み難い組織が多くあることもまた事実である。そこで、こうべ環境フォーラムが「具体的で取り組みやすく、かつその取り組みによりコスト削減などのメリットにつながる」ことを目的に環境マネジメントシステム(神戸環境マネジメントシステム = K E M S)を創設した。

昨年度は生協北館の K E M S 認証取得を目指し、環境影響項目を特定した。その結果紙の廃棄量が多いことが分かった。今年度は学内の環境意識の向上を目指して、生協北館において K E M S の認証取得の取り組みをサポートし、8月に K E M S を取得する予定である。K E M S 認証取得に向けての過程の中で節電・節水をはじめ、一番排出量の多い紙ゴミの削減、リサイクルの推進を行なう。具体的内容としては、コピー機の横にミスコピー用紙のサイズ別回収ボックスを設置し、OHP等を利用し資料の簡素化を行なう。また、ゴミ箱の横に分別を推進するポスターを貼り、リサイクルを促す。そして、一ヶ月毎に生協北館のゴミの排出量を計測し、データ化する。この一連の活動を通して生協北館の職員と北館を利用する学生の環境意識の向上が図れ、生協とより深いネットワークを築けると考える。さらにこのデータの結果を、生協のホームページの中の情報パックに掲載することで、学内全体で環境問題や K E M S について少しでも考えるきっかけを作り、自発的な行動につながればと考える。

(2)「あいな里山国営公園」(国土交通省)における環境教育ボランティア

申請者 (代表者) 氏名

神戸市北区にある「あいな里山国営公園」において私たちは2005年から、「あいなバイオパーク」が行なっている不耕起農法に、環境ボランティアとして参加してきた。今年度から始まる広野での不耕起農法の実践にあたり、すでに取り組んでいる人達の指導の下で体験し、不耕起農法のノウハウを学んでいく。また、その地域特有の自然、文化、伝統にも焦点を当て、私たちは地域の人々との交流もかねてヒアリング調査を行なう予定である。

あいなには歴史上有名な源義経や徳川道など、謂れのある古道や石碑があり、かつて農村歌舞伎が盛んであったため歌舞伎舞台も残っている。このように、長い歴史や伝統文化、希少な動植物が生息している地域でもあり、あいなという里山から学べることは様々である。そこから新たな気づきや知識を得て、今後の私たちの環境啓発活動に生かせればと考える。そして、昨年はゼミ生だけで活動してきたが、今年度は他のゼミ生など、より多くの人と共にヒアリング調査をしていくことを予定としている。

(3) 甲南三学園における幼稚園、小・中学校、高校、大学間のサポート

甲南三学園環境教育プロジェクトの活動として、私たちは2001年以来今年度も甲南幼稚園児から大学生とともに、広野での田植え、稲刈り、脱穀、もちつきなどの活動、及び住吉川環境学習を一緒に行なっていく予定である。住吉川環境学習とは、甲南



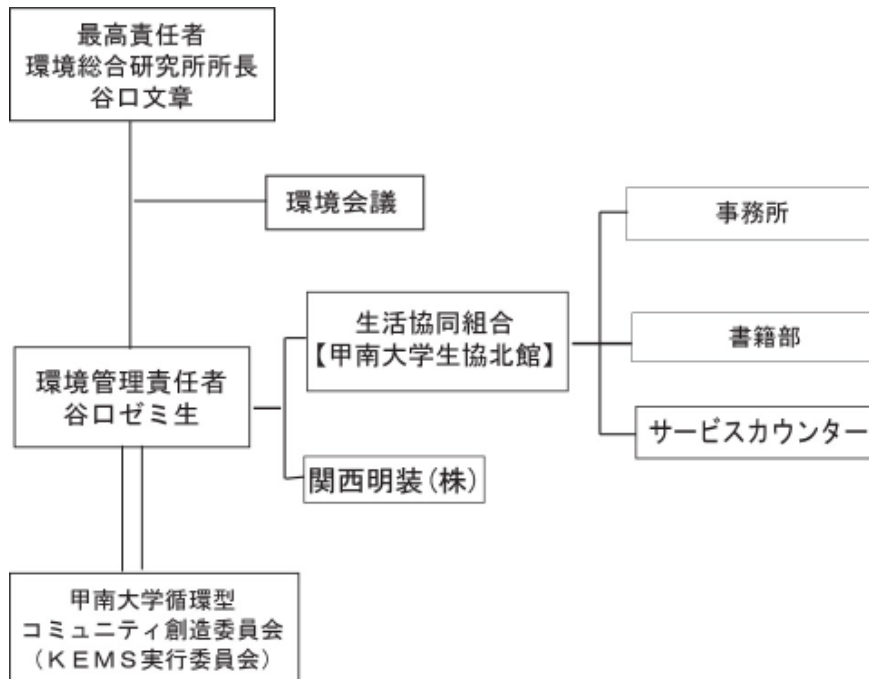
小魚を捕まえる甲南小学生
(住吉川、2006年9月)

の小中高校生とともに甲南小学校の近くにある住吉川で、水質調査やどのような生物が棲んでいるか、どのようなゴミが落ちているかなど身近な地域の環境の実態にふれる体験学習である。このような活動を通して、次世代を担う子どもたちが環境についての新たな気づきを得る機会となればと考える。

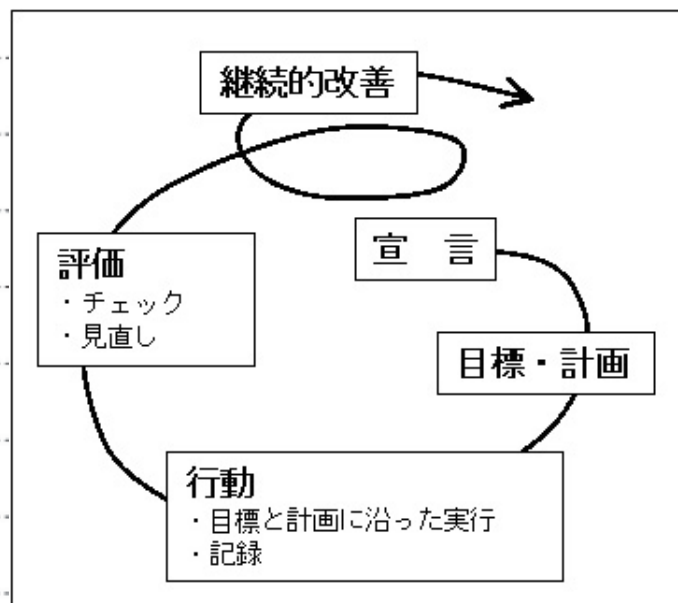
申請者(代表者)氏名

参考資料

< K E M S 実行委員会組織図 >



< P D C A サイクル図 >



申請者（代表者）氏名

経費等：

省 略

(2) 役割分担

谷口研究室 4回生：10名 3回生：9名 研究生：1名

プラン：学部生

プラン：学部生

プラン：学部生・研究生

申請者（代表者）氏名